
荀公達の憂鬱～真・恋姫＋無双

夏蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荀公達の憂鬱～真・恋姫十無双

【Zコード】

Z8348Z

【作者名】

夏蘭

【あらすじ】

30代の元オタク青年は、日々の息苦しさを感じながらも、いわゆる真面目な生活の果てに、妻子を庇い交通事故で死亡する。

開放感と偏愛する妻との別れの淋しさに戸惑う彼を、『外史』というゲーム発の肥大した概念が取り込み、彼は、荀攸、字を公達として、かの三国志のパラレルワールドへと飲み込まれていく。

真っ白な世界で真っ白な漢女で（前書き）

よくある転生ものですね。軽い気持ちでお読み頂けると嬉しいかな。

真っ白な世界で真っ白な漢女で

「ふむ…ダーリンに比べるとパツとしないオノ「よのう」」

車に刎ねられ、薄れゆく意識の中で、
妻子が助かったのを辛うじて見届けたすぐ後に、自らの生を終えた
はずの俺が。

なぜ、今、目が覚めたような感覚を持っているのか。

まして、瞳を開いていなくとも分かる、この特徴的な話し方。
野太い声の癖に、しつかりシナだけは作っているから、余計に気味
が悪い。

…これ、間違いじゃなければ、師匠っぽい声のあの漢女だよなあ。

あー、子供が産まれる前はいわゆるオタクだったから、判るんだよ。
いわゆる1~8禁つて奴にも普通に手を出していたし、
三国志とか信長とか、ああいうスルメゲーも大好きだ。
流石に遊ぶ時間は減つてたけどな…子供が産まれたら、
育児放棄でもせん限りは自然とそうなつてくる。

が、今はそれが問題じやない。

薄目を開ければ、邪馬台国にいるような白髪の男。見事な髪。燕尾
服に海パン。

うん、立派な変態だ。じゃない、ビンゴだ。

死後の世界がこんなのがアリかよ。

「しかし、ダーリンとは違い、大人の男性の色香もまた…」

うわあ、頬を染めるな。くねくねするな。

：ゆつくり永遠の眠りにつけると思つたけど、そつもいかないか。

「ずいぶんといい趣味をお持ちのようだ

「むむつーー？」

事故にあつたはずの俺の身体は、激痛の欠片も感じていない。
現世で万が一、生き残つたとすれば、呻くことすらままならないはず。

あえて、一気に上半身を引き起します。

警戒したんだろ？、一歩ほど引いてくれた。……精神衛生上、ほんとに助かつた。

「うわあ、傷一つないぞ……おまけに、真っ白な世界に田の前に漢女
つて、
新しい地獄が始まつたとしか思えん」

死んだ、つて自覚がある。だから、妙に冷めてるし、取り乱すこと
もない。

夫として、父として、最低の義理は果たせて死ねた。人としては真
つ当な理由で逝けた。

そりや、もうちょっと生きていたかった思いも無いわけじゃない。
ただ、自墮落に生きて、のたれ死ぬことを肯定していた時期から、
妻に出会つたおかげで更生はしたけど、正直、全うな生き方がどこ
か息苦しくて仕方なくて、

それでも、投げ捨てられる程には情を捨てられず。

一粒種の息子についても、父親の役割はやつてるものの、

妻のように無心の愛情は持てず、どこか義務感に縛られていて。

突つ込んで言えば、妻の非難を恐れたから。妻に軽蔑されるのを恐れたから。

妻への依存を自覚する自分が、子供を愛しきれないことを妻に問題視されるのが怖くて。

必死に愛するふりを続けた。

いつか本物になればいいと思いつながら、そういう変化すら感じず。三年近くがあつといつ間に過ぎていた。

いつやって文章にして考えると、俺もいい感じに歪んでるな。
まあ、それはこの場では置いておくべきことだ。

「なあ、あんた。俺は死んだんだ。俺の妻と子は無事だったか分かるか？」

「むう。亡くなつた者は通常、もつと慌てたり取り乱すものなのが。

：だが、まずは問いかけて答へよ。安心せよ、お主の妻と子は無事じ

「や

「… そつか。死んだ甲斐があるつてもんだな」

「他人事のような言い方だのう」

「極論を言えれば、妻もえ無事ならそれでいいんだ。

それに付随する者もついでに守つただけの話で。

とにかく…教えてくれてありがとな。

嘘を言つてゐる様子もないし、いついう問いかの答えを偽る性格でも無さそうだ」

俺の言葉に反応した卑弥呼（？）の困惑顔つて奴は設定に無かつた
気がするが、

これはこれで貴重なものを見れた。
さて、どうせ死んでるんだし、魂とか消される前に、聞きたいことは
は聞いてみるかな。

やひよつ、転生なんですか？（前書き）

もし、外史に落とすといひまではサクサクいきましょい。

やつぱり、転生なんですか？

「ところで、外史の管理者たる貴方が、なんで交通事故で亡くなつた冴えない中年前の男の所に現れたのか。早速理由を聞かせてもらえませんかね？」

大した理由が無ければ飽きるほど泥のように寝たいんですが

とある病氣で、殆ど自主的な寝たきり状態にもなつたことがあるが、あの感覚に似てる。

それに、早く意識を飛ばさないと、色々まざい。思いを馳せたら、もつヤバい。

「…既に儂のことも知つておるとは。貂蟬め、何を考えておる…」

一番最悪なのが外史に飛んでくれうんぬん…って奴だ。

あの一刀くんみたく主人公補正もなく、現代で武道の有段者だった…なんてこともない俺が、あの世界なんざ行つても殺される。

恋姫たちはモニターの中だから愛らしいのだ。

実際に相対したりしたら、ただのモブである俺なぞ一捻りで首チョンパか、

謀殺されて、どこかの路地裏でぼつちよであるのが関の山であるう。

「…ハツキリ言つオノコよのづ」

あれ、口に出てたか。まあ、そんなわけで行きたくはないのですよ。

それこそ、なんかのチート…いわゆる反則能力とか、種馬君のような、一撃必殺の笑顔であるとか。

そんなものがあつて、やつと舞台に立てる程度のもんでしょうし。

「だがのべ、既にお主はこの狭間に辱められてしまつてゐる。正史の時間の流れから逸脱した存在になつておるのみ、お主も自覚しておるのではないか？」

「…嫌だ、と言つたら」

「儂らが適切に外史に送り込まずに、放置された迷い人は、永遠にこの狭間を彷徨うことになる。

この何もない真っ白な世界に、一人、儂らも迷い人になれば、見つけることは困難になつて」

「うわあ、気が狂つてそのままバッドエンディングですか。

拒否権無いじゃないですか、やだー。」

「現実逃避は良くないと思つがな。まして、儂の姿を見ても慌てる素振りも無いのだし、流れも薄々予想できていよつて」

「…ああ、こんちくしょ。」

「自分勝手にやるからなー。やつと解放されたんだ、まともな生き方なんか真つ平だ。」

「引きこもり生活実践してやるからなー！」

「お主を外史に誘導するように指示した者からは、特に何も言われておらぬからな。」

「ただ、お主の向こうでの生まれなどは決まっておる。そろそろ時間が無いので、駆け足で説明するぞ」

説明の内容をまとめると。

この場所は、外史の狭間。

一刀君がしおり出入りしては記憶消されて、送り出される場所。
…悲劇やな。

管理人の卑弥呼さんの自伝紹介。ようするに予測通りですよつと。

外史の想念つて奴は実際存在していく、例の会社がたまたま近い概念でゲーム化したから、

より明確に実体化し易くなつていて、正史から人が招かれる下地も整いやくなつていてこと。

…まあ、無差別に、つてわけじゃない、つてことだが、はた迷惑なことこの上ない。

もう、10代の英雄の存在に心のどこかで憧れる時期なんぞ、とつくる昔の話だ。

んで、俺は荀攸、字を公達として、あの外史に降りる。

…明らかに霸王様に近しい位置じゃないですか。引きこもり不可っぽくね？

まあ、頑張つて阿斗ちゃんっぽく生きるだけだけどさー。

荀家つて時点で、一ノート生活無理っぽくないか…同馬家なら大丈夫だつたのに！

赤ん坊スタートだけど、記憶がハツキリするのは物心ついた頃からつてことだが、

うわあ、いろいろ嫌すぎる…猫耳軍師の幼少期と関わるなんて勘弁し…。

「では、行くぞ…」

回想途中で、俺は時空の渦に飲み込まれ、強引に意識を失うことになるのだった。

「貂蝉」『ご主人様』の為とはいえ、

修正力を背負わせることなど…本当にできると思つていいのか？確かにあ奴は自身の存在が消えること無頓着な所があるようだが、だからとはい…まして、あのような異端の力をどう使うと…」

白の漢女の独白なんか、俺に聞こえるはずがないのだった。

さひ、じめつ、転生なんですか？（後書き）

さて、亞セリもつ生活の実践は出来るのか？

苟公達として絶賛されても…つたい（前書き）

桂花の親はかくあるべや。

* * * * *

当時の儒家思想を考えると、流石にどうなんだつて設定があります。それゆえの恋姫無双を題材にした一次創作ではありますが、気に触る方は閲覧を控えて頂けると幸いです。

荀公達として絶贊引されても… つたい

うこす、とある外史の荀公達です。

あ、外史であつても、三国時代は『呂』が真名並みに、公式の場では、場合によつてそれ以上に重要視されているから、うつかり『荀攸』さんなんて言つたら、即村八分だから注意な下手したら即斬られても仕方ない。これ豆知識。

大体、満三歳ぐらいで大凡の記憶をしつかり認識したんだけど、そん時にせりの外史の両親が既に亡くなつていたといつ…。

完全に以前の記憶を認識しつつ、荀公達として立ち回るよつになつた頃には、

俺は荀勗さんと、親戚の家に引き取られていた。

字は教えてもらえてないんだよな…。理由は後で説明するんだが。（作者注：正しくは『勗』の文字には系偏が付きますが、常用外漢字の為この表記を使います）

覚えていないから悲しがるも何も無いんだが、まあ、儒家思想つてのが強いこの時代。

遅いかもしれないけど、物心がついた今から三年間は喪に服す、なんて言つたら、

なんて孝行者なんだか、つてことで、絶贊引きこもりが許された。やつたね！

流石に食事を含めた身の回りの世話やり、屋敷の中でもせりもるこ

困らぬ竹簡やり、

この時代では貴重な紙で出来た書籍の山であるとか、

そういう手配はしてくれたから、退屈することもなく。

この世界の常識とか、文字とか、学問とか、知るには事欠かなかつた。

元オタクの俺はゲームのみならず、雑学とか知識を仕入れるのに楽しみを覚え没頭するタイプであったから、

『ばつちーー』ってなもんだったのだ。

食つちや寝しながら、好きな本を好きなだけ読んでいられる。

そんな本の虫となつた俺に、荀昆さんもドンドン読み物を差し入れしてくれる。

環境としては、本当に恵まれていると言えた。…言えるはずだ。

「夏蘭からんは文若ぶわくのいい先生になつてくれそうね。母として花が高いわ

」

「義母よふく上…、私ではとても務まりませんよ」

「やつやつて謙遜する夏蘭は可愛いわね。ふふ、銀花ぎんかと呼びなさいな。

他の用が無い時ぐらー…」

うん、変態エロ百合の親はやつぱり変態ショタコだつたんだ…。

義父もすんげえ童顔わらわんだしさ、性徴セイウが始まつたら、私の側室わきむろになりましょつね…とか、

こつちが分からないと思つて、赤裸々な欲望丸出しなんです、ええ。

ただ、これで済南郡の太守業務を、桂花が産まれるまで見事に統治していた優秀な文官であることは知られていて。

さすが、神君の娘『八龍』だと民達に絶大な人気を誇っていた。

桂花産まれたから、普通の母親になります、

とかなんて言って職を辞した時はかなり騒動になつたとか。
ただ、辞めた本当の理由が、当時孤児となつた俺の光源氏計画を発動させる為、

というは、俺や義父上しか『り知らぬこと』である。
俺の記憶を持つていてない普通の公達くんがいる外史だつたら、
たぶん世に出てくることはなかつただろう……。

あ、だから、原作の恋姫の世界で荀公達がいなかつたのか。
…おつそろしい外史の暗部だな、おい。

字を教えてもらつていないので、真名で呼ぶことを強要されている
から。

俺の真名を教えてくれたのはこの人なんだが…ほんと、どんだけだ
よ！

必死に『義母上』と呼んで自衛を図る日々です。

二人きり…いや、母上の背中には桂花がいるんだが、
実質二人きりの時に義母上…銀花さんの名を呼んでしまえば、
俺の外史人生終了のお知らせが待つていいのだ。

桂花が歪んだ理由…絶対、この人のせいだよ…。

苟公達として絶賛されても……つたい（後書き）

「の親してあの娘あり……。

貞操の危機回避で身体を鍛えるよひ（前書き）

公達くんは身体を鍛えるよひです。

貞操の危機回避に身体を鍛えよ!

絶賛引きこもり期間継続中の俺だけど、

欲望を隠そとすらしない銀花さんに対し、

俺は子供の振りして、光源氏とか側室なんて判らない風を装いつつ、

毎日にじり寄つてくる危機と戦つっていた。

俺の髪に触れたり、俺を母親の抱擁とか言いつつ抱き締める時の銀花さんは、

頬が判り易く紅潮していて、瞳もハツキリと潤んでいる残念っぷり。吐息も明らかに熱が籠つているし、耳元で艶のあるため息を付いたり、

『我慢しなくともいいのよ、こつでも受け止めてあげるわ…』とか、露骨に誘惑してくる変態っぷり。

学を教わる時とか、誰か人目があれば完璧な淑女を演じきつてみせるし、
隠遁したとはい、来訪するかつての仕事仲間に惜しみなく知恵を貸すし、

田那さん…義父との仲も変わらず良好なので、

俺に感けてない時は、実に堂々たる荀家の長を務めているのだ。

普段は尊敬してゐし、孤児の俺に並々ならぬ愛情を注いでくれているし、

感謝こそすれ、嫌う事はない。

今はあまりに非日常すぎて、妻に一度と会えない寂しさを思い出す時間も、

結果的に少なくなつてゐるから、変に落ち込む時も少ない。

だから、俺は彼女を拒否はしないんだけども…。

「だつて、夏蘭に完全に堕ちて、貴方だけの雌豚になつたら、貴方は私を軽蔑するでしょ？」「

別の意味でも淑女過ぎるわつ！ 勝手に心の弦を覗くなつ！ たかだか五・六歳のガキンちょにそんな言葉を使うなああああああああ！

俺は間男なんかになる氣は無いんだつ！

・・・ゼーはーゼーはー。

「ふふふ、興奮した夏蘭も可愛いわ…ほんと食べてしまいたい」

「ほんとに義母上、真つ当に生きて下さいよ…」

桂花がもう少し大きくなつて、今の義母様の状態を理解すれば、私は彼女に憎まれかねません」

「あら、夏蘭は親子…」

「望んでもせんつ！ どつしてそんな発想になるんですか…」

この外史の女性に漏れず、銀花さんも細身の身体に恐ろしい筋力を秘める。

子供の身体の俺」ときがいくら慣れようと、容赦なくロッカされたままの状態で。

文官のこの人でこれだから、武官連中なんぞ想像もつかん。

うん、今も銀花さんの膝の上だよ。両腕にがつちり捕まつてますとも、ええ。

桂花に困んでなのが、母たる彼女は金木犀に似た、何ともいい匂い

がする。

ほんとはこの香りに安堵して眠つてみたいと思つこともあるが、さすがの俺も、このガキの年頃での腹上死フラグは全力で回避する。

翌日。

俺は義父の元に密かに足を運び、
鉄扇と今の背丈に合う模擬刀を用意してもらひつゝお願いした。

「銀花を受け入れてくれていいんだよ？」

彼女は狭量じやないから、公達に溺れたとしても、
私への愛情はまた別にしつかり育むことが出来る女性だ」

いやいや、義父上。むしろそこは全力で止めて頂きたいのですが。

「だつて、銀花は君の西室に通つよつになつて、また一段と綺麗になつたもの。

「だけどなあ」

俺は部屋の中での素振りと、

読書時にも鉄扇を持ち、常に腕を鍛えるように心がける日々を始めた。このことから、腕の筋肉が強くなり、腕を鍛えるのが大好きになってしまった。

さすがに命の危機を感じると、前世でやつたことのない鍛錬つて奴も、
自然に続くもんなんだよ……いや、必死さつて大事なんだねハハハ……。

「夏蘭が筋肉むきむきになるなんて、私は許しませんよっー。」

「嫌いになりますよ、義母上」

「うわーん！ 夏蘭に嫌われちゃううー。」

マジ泣きである。

20歳以上のはずなのに、なんでこつも少女のよう泣くのが似合ひんですか、義母上…。

「大丈夫、最低限自分の身を守りたいと思つだけだから。
だから、安心して。『銀花』」

こんな時は真名呼びと頭を優しく撫で撫での連携攻撃と、対処方法が決まっている。

どうしても機嫌を損ねてしまつた時に、真名を呼び捨てないと許さない今まで言われ、
それ以来、こんな感じで。

「え、えへへ…夏蘭が真名を呼んで、頭撫でてくれて…」

うん、確かに可愛いと思つんだけどさ。

外面が子供でも、俺の中身は立派な三十代のおっさんなわけでも。
保護欲も沸くつてもんなんだけど。

五・六歳の子供が大人の女性を、真名を呼び捨てながら、頭を撫で
続ける情景つて、
うん、ありえんわ…。

貞操の危機回避に身体を鍛えよう（後書き）

人間追い詰められると、今まで出来もしなかった事が、急に出来る様になることがあるのです。

緩やかに日常は翻壊していく（前書き）

引きこもつ生活にも陰りが見え始めます。

緩やかに日常は崩壊していく

喪が明けて、俺は八歳になりました。

叔父さんが酔った勢いで刃物を振り回し、桂花に当たりかけて、とつたに庇つた結果、俺の耳が傷つくという事件もありました。史実通り、叔父さんには伏せるという話になつたので、それを理由に引きこもり生活は無理やり続けています。

…といつても、邸宅から出ないだけの話で。

いや、荀家の邸宅は、現代の一般的な小学校ぐらいの広さがあるので、

運動するにも困らないのです。

中庭を走り回るだけで、十分な走り込みができるぐらい。

少年期だからなのか、ある程度鍛えても筋肉隆々にならぬ」ともなく。義母上も最近は俺の行動を咎めず、「

「額から流れる夏蘭ちゃんの汗をペロペロしたいわ…」と、おつと…いつも通りだった。

過剰なスキンシップと思い込むようにしてから、既に三年余り。

発育も順調に進み、身長4才(120cm)程度となり、さらに鍛錬の成果が出始めて、

行き過ぎる行為には少しずつ抵抗も出来る様になつてきているが、義母上はどこぞからか関節技を学んできて、

田々の戦いは一段高い極みに届こうとしている。…どうしてこうなつた。

…俺の成長が嬉しいと言つのなら、諦めてくれるのが一番嬉しいん

ですがね、義母上。

こんな変態の義母上も対外的、突き詰めて言えば、俺以外には相も変わらず、

見事なまでに荀家の長を務め続け、

義父との間に新たな子供：荀しゅん甚しんが産まれている。

正史では、荀或じゅんわいの兄弟、袁紹の參謀になつた人物だな。まあ、夫婦仲は良好なわけだ。

「夫への愛と夏蘭への愛は別腹なのよ…！」

「うん、義母上。

そろそろ、文若もその意味がほんのりと判るとも限らないから自重して下さい。」

「なによ。その辺りは夏蘭からんがちゃんと教えてくれればいいじゃないー」

二人の子供を産んだのに、年頃の娘さんと変わらぬような体型、風貌を保ち続けているこの人は、別の意味でも人外の域だと切に思つ。

といふが、俺の前では完全に精神年齢が子供に近いものに戻つているし。

日々のストレスを発散しつつ、俺から精氣を巻き上げている錯覚すら覚える。

触れるだけで、道教で言つ『氣』つて循環するんだっけか？

「第一、桂花も貴方にべつたりじゃない

「兄として慕つてくれているようですね、ありがたいことだと思いますよ」

義母の真似をして、桂花が俺に日中はほほべつたりくつこしている状態になつてからは一年ぐらいか。

影響受けるだらうなとは思つていただが、やつぱりな、とこう結末である。

懐かれるのは嬉しいものだし、俺からすると娘が出来たような感覚で、愛らしく感じているのだが、さて、いつ頃彼女本来のツンが出るかとやつり。

「…ねえ、夏蘭」

「なんでしょ、義母上」

「以前から思つていたの。桂花は聰い子だけど、すこく気難しい所がある。

だけど、貴方は少なくともあの娘に慕われていぬし、既に真名も許された」

「…真名の本当の意味合いをまだ、文若は判つていないのでしょう。だから、私も実際に呼びはしませんし、私も自分の真名を許していな」。

その辺りは少しずつ、理解してくれればと思つています」

本人には、文若と呼ぶのが当たり前になつてゐるから、と説明はしている。

ただ、彼女自身は納得はしていないし、
今後の彼女の成長に合わせて、対応を一步間違えると、
どうぞの種馬君みたく日々罵倒される立場になるのは想像に難くな
い。

「そう。その物言いもそつなのよね。

貴方の前では、私は子供に戻る感があるし、それを自覚している。
それを問題なく受け入れてくれる貴方を知っている。

：ただね、貴方はまだ八歳の少年。

五歳児の頃には、今の雰囲気や話し方が完成されていたわね。

ただ、それはとても異常であるということを自覚している？

喪中とか、叔父さんに気取られないようにとか、
色々理由をつけて、引きこもり万歳だったから、

基本会話を交わす相手も、義母上とか、本当に一部の人には限つてい
たこともあり、

全く子供っぽい振る舞いはせずにきたからなあ。

屋敷の使用人の人達でも、会話をしたことのある人自身が殆どいな
いこの事実。

まあ、いざれ問われるとは思っていたけど。屋敷を出て行くのは意
外に早くなりそうだ。

ただ…泣きそうな声色で、問いかけるのは何故なのですか、義母上。

緩やかに日常は崩壊していく（後書き）

珍しく母親モードの苟延れん。

* * * * *

じょんじん じょんじく
苟基、苟或は当て字です。

機種依存文字になるから、文字化けしてしまつ為ですね。

問答（前書き）

引きいりもつ生活とも徐々にお別れなのです。

「桂花や友若のあやし方や、

おしめの世話にしても貴方は本当に手馴れたものだつた。

一度見て覚えたといふけれど、あの手際の良さは異常に映る。
寝かしつけにしても、あの人よりも上手だもの」

「…子供らしくなくてすいません」

「いいえ、詫びるべきは私であり、夫であるべき。

貴方はその年にありながら、立ち振る舞いや精神面は立派な成人で
あり、

時に老齢なものすら感じられる。

子供の背伸びなどでは決して無い、ある種完成されたものだわ。
その包容力に、私達一家は甘えて「に過ぎない」

「買い被りすぎです、義母上。

赤ん坊の泣き声に苛立ちを隠しきれない子供ですよ、私は

「でも、その苛立ちを、貴方は桂花や友若にぶつけることは決して
無い。
おぐびにすら出さない。

赤ん坊はそういうものだと、貴方はしつかり飲み込めているからよ。

桂花の夜泣きで眠れぬ夜を過ごして、いた私達を見かねて、

一日置きに離れにある貴方の居室にさも当然のようだに引き寄つた貴
方は、
あの時、私達の誰よりも親らしかつた

「軽率であったと思します。子供の振る舞いとしては気持ちが悪す
べし」

罪滅ぼしの代償行為だった。

前の世界で、息子に対しても事務的な父親の接し方しかしてやれなか
つた。

一度目ならば、もつ少しもつまくやれるだらうと、

そんな俺自身の、自己満足の為の我がままだった。

この世界で、義母上が過剰ながら惜しみなく与えてくれた愛情に、
妻と会えぬ寂しさを強く感じずには過げせた、せめてもの恩返しのつ
もりだった。

ただ、五・六歳の子供が乳児の世話を完全にしてのけるのは、
明らかに異常であったのだらう。

乳母に任せせる選択肢ももちろん取れたはずだ。
可能な限り家族で育てたい、

そう願つた義母上の希望を勝手に掬い取つた、俺の身勝手であった。

「いえ、私こそ本当にごめんなさい。私は、夏蘭に亡くなつた父の
影を見ているのよ。

だから、必要以上に我慢になつ、童心にも容易く帰つてしまつ

「それで、良いのですよ。

その代わりに、私の異質さを飲み込んでくれていたのでしょうか？

…いつか、この家を出る前には、全てお話したいと思います。

それまでお待ち頂けませんか、銀花」

彼女の頭をなげなしの胸板とまだ短い両腕で包みながら、俺は静か
に告げた。

もう少ししじだけ、この穏やかな日々を、続けていたい。それは偽りざ

ぬ本音であったから。

「「Jんな時だけ、真名を呼ぶなんて、本当にズルい男性であること。
…まさかと思うけど、この年で貴方、こつそり女を誑かせたりして
いないでしょうね？」

「無いですね。男として、子を成す事すらまだ出来ない未成熟な身
体なのですし。

仮にそういう欲も制御する術も心得ていますから」

「…夏蘭。本当の貴方は、一体何歳ぐらいのかしら」

どうしようもない、悲しみの色は消えて「」るよつに感じじる。
率直な問い合わせ。秘密を共有したい、そんな希望といつたところなのか。
いつもの義母上の調子が少しだが戻つてきている。

「四十にまもなく手が届くといったところです。

ただ、無意味で年だけを重ねても、大人には成り得ない、
それぐらいは判つてゐる、ということでしょうか」

「成る程、私が適わないわけね。

「夏蘭、貴方が秘め事を明かしてくれる日を待つてゐるわ」

この夜以降、義母上は私を外出時や、元部下の訪問が合つた時など
に、
従者の一人として、常時同行させることになる。

俺には、独立した後の為に、密やかに人脈を築かせる為。
義母上は、俺を密かな相談相手として。

そりや子供を相談相手にしようなんて、普通考えられないからなあ。

隠遁生活のお陰で、俺の事は荀家以外には知られておりず、武経七書や五経、孟子や左伝などを読破して、義母上と政策論議に興じていることなど、世間様は知らない。

この時代の知識人を直に見て、自らの知識と知恵を精錬させつつ、その知恵を披露して実践する機会を、義母上は作ってくれたのである。

「ふふ〜ん 私だけが夏蘭が神童たる存在であることを知っている。

なんといつ甘美な秘密なのかしら…」

まあ、外出時も油断すると通常運転になるので、その辺りの気疲れは増える事になつたのだけど、それは別の話だろう。

問答（後書き）

銀花義母上の個人的な相談役ポジをやりつつ、この外史を見ていくことになりそうです。

さて、幼女なオーホツホとか霸王さまを描くのであらうか。これじやまるで幼女無双じやないか・・・。

事件（前書き）

早めにヒロイン登場をせてしましました。

「疲れた！ 夏蘭、肩揉んで」

義母上と俺は現在、本家を離れ、後漢の都でのお仕事を蕭々と務めていた。

穎川太守代行に近い立場と権限を持つて、洛陽での折衝を担当しているのだ。

……義母上はいつの間にまた官職に復帰していたんでしょうか。俺の見聞と人脈は確かに広がりつつあり、義母上には感謝することしきりなのですが。

「はい、義母上」

「次は腰揉んで」

「はい、義母上」

「次は胸揉んで」

おひこり。流れのどんぐりで何を言つんだか。

「却下です、義母上」

「ふふふ。

ここは流れに乗つて、私の慎ましい胸を大きくすることに協力するといひでしょ？」

「……一人になつた途端、本当に平常運転ですね。

と言いますか、義母上。実は、気にしていらしたんですか。確かに一般的には小さいかもしませんが、

大小問わない男性はいますからね。義父上のように

紗耶に比べると小さいとは思うが、それだけの話。

俺にとつては彼女が、女性の水準であり指標であり、かつ絶対的なものに過ぎない。

思い出す度に喉が、肌が、心が乾いていく。彼女がいない世界で俺は一体何を……。

「えいっ！」

ぽかっ。そんな可愛い音が俺の頭から鳴る。

義母上お手製の小型ハリセンが炸裂したのだ。

ん？ スパーーン、じゃなくて、ぽかっ、てどうこうことなの……？

「失礼なことを言つた挙句、他の女の事考えてる~。

そんな情感の籠つた目なんて、私には絶対向けてくれないもの…」

義母上の頭の上に、『ふんふんっー』と吹き出しが浮かんで……いる…？

いや、幻覚だ、幻覚に決まつている。

さつきのハリセンの音といい、この義母上がいくら想像の斜め上を行くとはいえ、

そんな漫画のようなことがあるはずがないではないか！

夏蘭……貴方、折衝」との後で疲れているのよ……。

吹き出しが未だに見えて、おまけに『ふんすかっー』という言葉に

変わつてゐるなど、
俺は決して認めてはならないつ！

「さて、戻つた？」

「……はい、義母上。『いつも』ありがとうございます」

頻繁に絶望に覆われかける俺を、毎回こうして引き上げるのは、いつもこの人だつた。

「じゃあ、腰の続きをお願ひ。

晩には袁家と曹家の二息女との会食が控えてるのよ」

へ？ そんな話は聞いてませんよ！？

「あ～、気持ちいい。夏蘭は上手よねえ、按摩」

と、そこで義母上は一度言葉を切り、真面目な声色で話し出す。

「私と表に出る時点で、貴方の才が隠しきれないのは当たり前でしょ。

従者の振りをしていても、見るべき者はしっかりと見てるわ」

いや、私は従者ですから。第一、交渉事の時に、俺は一切発言していないじゃないですか。

「……荀家の懷刀、そんな識者達の評価がついているわ。
多分、私に知恵を出しているのが貴方と気づいているのでしょうかね」

その洞察眼の方がこええよ！

第一、俺の未来人たる視点の突拍子をつまみ噛み砕いて、この時代でも使える提案として仕上げているのは、義母上の才だといつの間に。

「で、早いうちから自分の家の娘に仕えさせたい、そんな意図なのではなくて？」

「よし、義母上。急用と称して、家にすぐ帰りましょう。今すぐ帰りましょう」

「いくら幼いとはいえ、霸王様に会うのなんて真つ平である。お一つほつほですら嫌だといつのに。」

「……諦めなさい。既にお迎えが来たようや。」

「仲和様、袁本初様と曹孟徳様からのお迎えが参られました」

侍女の声がかかるや否や、部屋の入口の扉が勢い良く開かれる。

「お邪魔しまーす。文醜、字を長騫つす。姫の命令でお迎えに上がりましたー」

「あうう、文ちゃん……親しい友達を迎えて行くような感覚で……本当に申し訳ありません。」

私は袁本初の使い、顔良、字を清臣と申します」

勢い良く部屋の中に入ってきたのが、真名が猪々子といつ、

この世界での文醜。

小柄ながらも、勝気な瞳に淡い緑色の髪を見れば、彼女とハッキリわかる。

そして、ペコペコ頭を下げながら遅れて入ってきたのが、真名を斗詩、この世界での顔良。

既に苦労人の雰囲気を醸し出す彼女は、綺麗な黒髪を揺らしながら、涙目ながらも、しつかりと挨拶をしながら頭を下げ続けていた。

さらに扉から続けて部屋に入ってくる少女がいる。あの青髪が見えたところとは……。

「失礼致します。私は夏侯淵、字を妙才。曹孟德の使者として参りました。

ほら、姉者も入ってくれ」

「いや、私はいいよ……偉い人に会つて苦手なんだよ……」

ビンゴでした。秋蘭さんだね。この世界の夏侯妙才。が、あれ？ こういう時の春蘭さんは猪々子と同じ動きをするはずなんだが……。

それに、なんだ。この声。俺の知っている春蘭の声じゃなくて。

「し、失礼しま……つて、ひーちゃん！？ ひーちゃんだよね！？」

息が止まる。この呼び方で俺を呼ぶ女性はたった一人。

「幼い頃の写真のひーちゃんにそつくり！

鍛えてるのかな？ 写真よりも凜々しく見える

「」

姿形は恋姫の春蘭の少女時代といづべき風貌。だが、やや幼いとはいえる声を、無邪気なこの仕草を、忘れないはずもない。

顔つきが違えど、彼女を誤認することなど有り得ない。

夢に見て、その度に目覚めて涙を流し、現実に壁を殴り続けては拳に血を滲ませ、

義母上や桂花に止められる毎日を伊達に八年以上送つてきたわけではない。

「紗耶…………なのか…………？」

「うん！ ひーちゃん、本当におねえたつ！」

飛び込んできた彼女を本能的に抱きしめる。理由とかはビビだつていい。

妻が、紗耶が俺の腕の中にいる。匂いまで一緒にだ。

「会えた、ひーちゃんに会えたよ…………」

未だ混乱する頭の中、俺はただただ最愛の妻を抱き締めるしか出来なかつた。

銀花さんの喜びと悲しみが入り混じつた視線や、

秋蘭さんたちの困惑した表情など氣づくはずも無かつたのだ……。

事件（後書き）

嫁さんを出すといひ今まで一気に持つていきました。
あとは依存ぶりをどう書くかですね……！

文ちゃんと苦労人さんの字は同じ姓の有名人付近から拝借させて頂
いています。

諱で呼ぶのは真名同様にやばいとしか思えないの…あばばばばばば。

盲目（前書き）

主人公の偏愛ぶりが一気に表面化します。

「紗耶の匂いだ……姿形は変わっていても、うん、間違いない……」

「うう、ひーちゃん。さ、さすがに恥ずかしいよ……。

それに、私、まともな自己紹介も出来ていないので……」

「外野なんぞどうでもいい。邪魔する奴は全て潰せばいいんだ」

椅子に腰かけた自分の膝上に、紗耶を座らせ、後ろから強く抱きしめることで、ピタリと密着して、思い切り鼻をくんかくんかし、顔をこすりつけるように彼女の髪に埋める。

嗚呼……！ なんと心が潤い、満ち足りていくことか！

魂が叫ぶ。外見が春蘭であるうと、この女性は俺の妻、紗耶であると。

八年あまり、恋い焦がれ続けた、俺の半身と言える……いや、半身である存在の紗耶を、どんな形であれ再会出来た今、片時も離すつもりは無い。

しかし、夏侯惇か。一人きりで暮らすためには、曹操はやはり消すべきか？

この世界の曹操は夏侯姉妹が自分に絶対の忠誠を誓っていることを、疑いもしないだろうし、そうしない彼女たちを認めよつともしないだろう。

今ならまだ六歳かそりゃといったところか。消すなら今だな、くく

つ……。

「う、うわ……あたしが斗詩を愛する時よりも激しく変態つぶりだぜ……。

あたいでもここまで公然と出来るかどつか……つー。」

「ほんとこりで変態発言しないでよ、文ちゃん。

とにかく、口元がすりへ垂んでるし、とても悪い顔してるよお……。本当にこの人が噂に聞く荀公達さんなんでしょうか……。」

「……わたしの、わたしのからんがああ……。」

「荀都尉！？ しつかりされよ、荀都尉！ 気をお確かにー。」

外野が煩いな。……消すか。

この世界だと社会的にではなくて、直接手を下しても構わんのだろう？

「か……らん？」

「！？」

「ぐ、ぐわつ

「ひつー？」

何を貴様らは蛇に睨まれた蛙のような表情をしてる。俺と紗耶の時
間を邪魔したのはお前らだ。

「ひーちゃん、駄目だよ。相変わらず、私が絡むとすぐに変になる

んだから……。

ほら、皆固まっちゃってるよ?」

「む。紗耶との時間を邪魔する奴らは滅ぶべきだろ」

いや、消すつもりだったから、硬直してくれるのはむしろありがたいんだが。

顔良なんぞ失禁してるから、小便臭いし、止めを刺してやるのはむしろ優しさだ。

「久しぶりに出会えたからって、周りが見えなさ過ぎだよ。前の世界でもいつも周りの人が凍り付いていたのに、今は鍛えてるから余計に、どう見ても危ない人だよ……。

でも、ひーちゃんってそうだったよね。ふふつ、何十年ぶりの感覚だけど、安心しちゃう私もダメ人間だな。私の為に怒ってくれるひーちゃんが嬉しくてしょうがないよ

「紗耶がダメ人間なら、他の奴らは塵じやないか」

紗耶ほど優しい心を持つ奴など簡単にいるものか。

「あ、姉者、なぜこの狂氣と殺氣が濃厚な状況で、普通に話せるんだ……。

華琳様とて、これ程の霸氣は……」

「だま……」

「ひーちゃん、悪いけどちょっと黙つててね。なでなで」

紗耶に頭を撫でられ、制止されたからには仕方ない。大人しく黙る。再び髪に鼻を埋め、ささくれ立つた心を癒してもらう。

……紗耶はやつぱりいい匂いだ。

殺してやると思っていた怒れる気持ちも、斯と解けていく。

「秋蘭、大丈夫？」

「な、なんとかな……。ただ、顔清臣は気を失つたし、荀都尉に至つては完全に呆けてしまった。会食は延期するしかないか」

「それと、私はしばらく帰れないから、華琳様にうまく伝えてほしいな」

「な、なぜだ？」

「事情は後日説明するから。明日もこちらに来てくれると助かるよ。荀都尉は私とひーちゃん、じゃ分からぬいか……。ねえ、ひーちゃん。他の人にはどう呼んでもらつたらいいの？」

「他の人に呼んでもらつ必要はないよ」

他人なんざどうでもいいし、今はこの香りを堪能したいんだって。

「私は少なくともしばらくひーちゃんの傍を離れないし、ずっと離れない為にやることがあるでしょ？ 私は夏候惇になつてているわけだし」

「むー」

面倒くさい。憂鬱になる。

「むー、じゃないでしょ。ほら、秋蘭も困り果てるよ。

私を今まで守つててくれた、この世界の家族だよ？」

「……確かにそれはいかん。俺に再会するまで紗耶を守つてくれた
人には礼を忽くすべきだな。

「これは失礼した、夏候妙才殿。」挨拶が遅れて申し訳ない。
私は、荀攸。字を公達。真名を夏蘭と申します。
妻をずっと守り続けてくれたことを深く感謝致します。
私ごときで出来ることがあれば、何でも言いつけて下さいませ。
あ、但し、紗耶と離れるとか、紗耶絡みのことは受け付けませんの
で」

「しつかり挨拶するのはいいけど、私は膝の上のままなんだね、ひ
ーちゃん。

らしいけど、あまりにかつこつかないよ~?

あ、秋蘭。『紗耶』つていうのは、私のことね。

後日まとめて説明するから、今はそういうのだと飲み込んでおいてね」

「わかった、姉者。ただ、公達殿……妻というのは

「紗耶の言う通り、『そういうもの』です。

あ、紗耶と私を引きはがすようなことをすれば、

貴女たちのみならず末代まで呪い殺しますので、そのつもりでお願
いしますよ」

二ツコリ営業用の笑顔を見せた俺に、
妙才殿は壊れた人形のように、首をかくかく縦に振るばかりだった。
理解頂けて何よりだなあ。

こんな彼を当たり前のよう受け入れる妻も、ある意味、ね。

虚勢（前書き）

ハツタリも大事なことだってあります。
たぶん。

「へえ、呪い殺すとは穏やかではないわね。

それに私の秋蘭を怖がらせるなんて、貴方にそ唯では済まなくてよ？」

「……はつ、私は何を……」

「……なぜに貴女がこちらにおられるのですかね」

壊れた人形と化していた夏侯淵を人に戻した一声。

金髪ちびどり。未来の霸王。乱世の奸雄、曹孟徳だ。一目見ればわかる。どりにも俺より年下のようだが、既に立派な霸王をお持ちのようだ。

才やら内包する気が隠し切れないってどりなんだよ、ほんとこ。

今ですら背筋に寒いものが走るほどであるから、

成人した状態の彼女に初めて会えば、俺も今の頗良の仲間入りになる可能性が高い。

しかし、文醜さんや。失禁斗詩は可愛いなあ、じゃなくて、早く床やら彼女自身の後始末をしてあげるべきではないかな。まあ、俺も紗耶を愛で続いているから、人のことは言えないだろう、傍目には。

……世の常識など、紗耶の前ではどりでもいいんだが。

「あり、私のことを既に知っているのね。どりしてかしら？」

「先に問い合わせたのは」ひかりです

「ちゅうと、ひーちや……」

紗耶は少しだけ黙つていってくれな。ほっぺたを左右からつまみ、少しばかり引っ張る。

「ひたいほ、ぴーちやん」

涙目で訴える紗耶も変わらず愛らしい。思わず頬ずりしてしまつ、全力で。

「……そんな風に、貴方が春蘭を愛でて、あつといつ間に半刻（一時間）が過ぎたからよ。

会食の時間などとつぶに過ぎていてるわ」

「なん……だと……」

紗耶の愛らしさのあまりに、時空が歪んだといつのか！？
俺の感覚ではまだ五分程度しか愛でていないとこ、
時の針は一十倍の速度で進んでいたとは……。

「心の声が全部口から出でているわよ？

しかし、私の春蘭に何をとも思つたけれど、

春蘭がこんなにも表情豊かにアタフタしたり、顔を真っ赤に染めた
り、

愛らしい様子を見せるなんて、正直思わなかつたわ

「紗耶の愛らしさはどうあることか知らないので、まったくもつて
仕方がないな」

「同意したくないところだから……春蘭が愛らしここのは確か
ね」

「つむ、流石は人材『レクター』の曹孟徳どのはだな。見る目が違う」

「これくたあ？」

「遠い東にある異国の言葉で『集める者』といつ意味だ」

まあ、かなり未来の話だし、西から回った方が早いんだが、それは
些細な問題であろう。

「蓬萊國の」とかしづ

「蓬萊よりもつともつと東だ」

「なぜ蓬萊より東に國があると言い切るのかしづ。
伝聞や古い竹簡にも描かれていないといつのに」

（些細な話だ。気にするな）

「煩い奴だなあ。だから大きくなれないんだ」

あれ？ なんか部屋の空氣が一気に凍つた？

「ひーちゃん！ 心の声と表に出でこる声が逆だよー。」

「カクゴハイイワネ？」

あ、やつべ。殺氣を濃厚に含んだ霸氣が部屋中を包んでいた。

顔良なんか、可愛そう。

霸氣で意識が戻った瞬間、その霸氣の大きさにまた失禁してしまつてるよ……。

それに、体格に合わせてあるとはいへ、あれは立派な大鎌の一種だな。

幼少時から自分の得物にしてたんだな、霸王様。

「些細な話だ。気にするな」

「今更遅いっ！」

明らかに子供が振るう速度を超越した速さで襲い来る大鎌の刃。ただ、俺には余裕はそれほどないにせよ、模擬刀を構え、受け止めるぐいの時間はあった。

……片腕にはしつかり、紗耶を抱き留めたまま。

ギンッ！

金属同士がぶつかり、火花を散らす。止められた刃に、霸王様は驚愕の顔に彩られていた。

しかし、紗耶を抱き抱えているのに、巻き込んだらどうするんだよ、このサドっ！

「ひーちゃん、華琳様はそんなドジはしないよ？」

と言ひながら、紗耶は念のため、護身用の短刀を構えているし、

「そんなへマなどしないわよ、この性格破綻者っ！」

私が大事な春蘭に傷をつけるわけがないでしょ「うがつ！」

容易く攻撃を止められたように見えたんだろう。お怒りの霸王様の罵倒を頂戴した。

噴火しかけた俺の狂氣。

それを見越して、二人の発言があり、俺は爆発を逃れたわけだが。「あれ、また出てた？」

「……公達殿、全て口に出ているよ」

呆れ果てた口調で、妙才殿が教えてくれた。いや、なんか申し訳ない。

「しかし、孟徳殿。速いが、意外と軽いんだ。だから、俺でも止められた」

「なつ……！」

「俺と似たようなもんなのかな。外に出る殺氣の大きさに比べて、力量がまだ追いついてないつーか。

体格はどうしても年を重ねるしかないし、筋力は長年の鍛練が物を言つだらうからな。

ただ、意志の力つて奴は、子供であらうとも鍛えられるつて証明もある

まるで、虚勢を張つているように見えるかもしれないが、そのハツタリが効く相手には有効に使えばいいことだ。

「孫子曰く『戦わずして人の兵を屈するは、善の善なる者なり』つてな。

戦わずして勝つが最上、虚勢だらうがなんだらうが、物は使いようだ。

……ま、孟徳殿の信念とは相容れにくいかもしないが

「私は本物の力を欲するわ。……ただ、その使い方を知る者が、私の裁量の元に、

虚実を交えた軍略を取ることまで否定しようとは思わない」

それを認め、飲み込むのも上に立つ者の力量でしょう。と、霸王様は艶やかに微笑む。

この年でこの笑みが出来るといつのも、空恐ろしいもので。

虚勢（後書き）

華琳さまは自分で虚構の力を使うのは認められない。
だけど、配下の者が使うのまでは「基本」は止めない。

そんな印象を持つています。

泥水（前書き）

初見の人にはそう見えるのもやむを得ないのです。

主人公はプロントさんの影響を受けています。
某動画のプロント成宣さんが好き過ぎる。

泥水

孟徳殿の妖艶な笑みの後、それから四半刻程度か。

彼女と、紗耶（春蘭）の愛らしさを中心にして話を深めていると、あえて空気を読まない紗耶が、こう言ったのだ。上田使いで瞳をどこか潤ませながら。

「ひーちゃん、お腹空いた……」

「よし任せとけ！ 紗耶の潤んだ瞳の前では光の速さで作りざるを得ない」

そして、四半刻程度で出来上がったものが、お雑煮である。米を研いで水につけて…などとやつていると、時間がかかりすぎる為、

干し餅を使用して、簡易的な雑煮に仕立てたのだ。

「とりあえず、簡単なもので済まないけど

「ふざけているのー？ 泥水のような色じやないのー。せつかくのいい番りが台無じじゃない！」

はつはつは。孟徳さんの反応は予想通り過ぎる。

俺は紗耶さえ喜んでくれればいいのさ。他の人たちには食いたきや食べ、である。

「これつー。味噌汁の雑煮だつー。ありがとつー、ひーちゃんーつー！」

大喜びして抱きついてくれる紗耶。この反応に孟徳殿や、妙才殿は啞然。

いやあ、そりやそんな顔にもなるだろ？。日本人で無ければなかなか分かるまじて。

「うんうん、ちゃんと昆布やかつおぶしで出汁も取つてあるからな。味噌作るのは本当に苦労したんだ……」

実は、こつちの世界に来てから、貂蝉が一度だけ俺に会いに来たことがあった。

外史の管理者たる、マッチョな肉体にピンクのビキーパンツのみを着用した、

オカマの貂蝉であったのは重ね重ね無念である。

声はドラゴンボールのセルそっくり。まあ、強力若本だから仕方ない。

え？ メタるなって？

いや、そもそもゲームの世界観そのままの『外史』にいる時点で、それは言わないお約束つてやつだ。

目的としては、俺という存在が外史に根付いたことの確認。あとはいずれ判る隠し事があると言われたのだが、

『内緒よん』などと、しなを作りながら言われたので、詳しく問い合わせす気も起きなかつたのだ。

で、困つてることはあるか、と聞かれた際に、元の世界の味が恋しいと言つたとい、味噌や醤油などの作り方を授けてもらつた。脳に焼き付けてくれた、といつ。

実際には、紗耶が恋しいと言つたが、召喚は無理だと言われたのだ。

……既にこっちに転生させてるとは、流石に言えなかつたんだな、
と今になつて分かる。

召喚は無理、と貂蝉は言つたわけで、転生が無理とは言つてなかつたからな。

隠し事にしても、中々粹なことをして貰れるものだ。

といつても、実際に作るのはとても大変だつた。

味噌汁や醤油に恋い焦がれるぐらゐの勢いでないと、正直何度も
よつと思つたことか。

材料の準備からして苦労したんだ。

一回に造る量……一つの容器で、大体6キロできるんだが、

この時代の単位で、大豆が六斤、麹が九斤、塩が三斤半……。

現代の量で言えれば、それぞれ1・3キロ、2キロ、800グラム。

義母上の全面協力があつてこそだよ、本当。

この外史は酒がよく飲まれることもあり、

麹を手に入れるのに事欠かなかつたのもありがたい話だつたのだ。

「はつ！ この匂いは夏蘭の雑煮つ！ 私も食べるつ！」

「どうぞ。多めに作つてありますから」

「おお、匂いで義母上も復活したよ。

最初は色に躊躇つていた義母上も程よい塩つ氣を氣に入つてくれた
からか、

材料代は惜しみなく出してくれる。ありがたやありがたや。
容器としてのいい木桶も見つかったからな。

なんでも、陳留周辺でしか出回らないという代物らしく、
気を利かせた義母上が十樽ほどを一気に手に入れてくれていた。

一年目は四苦八苦していた味噌作りも、
造り始めて三年目の今は、小桶も手に入れて、配合を変えたり、
麹造りそのものに取り組み始めている。

木灰を利用して、米かゆに発生するカビから、麹菌を少しずつ採取
する作業だ。

手探りで行つてはいるだから、

実際に麹が造れるようになるのはかなり先のことになるだろう。
歴史とかにしてもそう。

三国時代末期の羅令則マジチート！……とか言つても、
ピンと来てくれる人が少なくて、悲しい思いをしたのも、懐かしい
思い出。

紗耶は歴史好きつて観点で最初に気が合つたから、こうこう濃い話
ができる存在だ。
さすが俺の嫁だよな！

「なつ……つ！ 萩都尉も春蘭もなぜ躊躇いもなく、それを口にで
きるところの……つ！」

衝撃のあまりに背景に稻光がちらついて見える孟徳殿。
額を押さえてるつてことは、既に頭痛持ちなのか？
妙才殿はお椀に鼻を近づけ、真剣に匂いを嗅ぎながら、
口に入れるべきか唸り続けている始末。……ちょっと面白い。

「……ああ、日本人で良かつた……お代わりある？」

「夏蘭の造つた味噌風味の雑煮は、相変わらず美味しいわ～。
母として鼻が高い高い 夏蘭、お代わりつー」

「どうぞ、紗耶、義母上。喜んでもらえて何よりですよ」

紗耶や義母上は「満足の様子で、造つた俺も嬉しくなる。
団詫の無い笑顔を見せてくれる一人は、どこか似ている氣もある。

「匂いは美味そだもんなー。よしつ、頂くぜつー」

「どうです、長騫（文醜）殿」

「うへ、うさんめーつー！ 斗詩も姫も食つて……あ

「……どうかなさこましたか？」

「まこひで詫ひしゆから、味のこじりじゃないよな？」

「姫のこじり完全に忘れてた……」

……あ。

泥水（後書き）

単位は三国時代当時の 1 斤 = 223 グラム程度、としています。

手作り味噌とか、文章にするとあっさりですが、こんな簡単に作れるわけは無いです。醤油にしてもそう。

近々、自分でやってみようとは思つているんですけどね。

麹はさすがに無理ぽ。

あつたく話が進まなかつた感じであるよ。
あつたく話が進まなかつた感じになつてもーた……。

おーつほつほ姫のことを完全に失念していた俺達。

……まあ、この世界での袁紹（字を本初）のことなんだがさ。

いや、気を失つていた清臣（顔良）殿は別として、

長騫（文醜）殿まで完全に忘れ去つてこるかというなんだよ。

「斗詩のあられもなし姿や、うまいもん食つてたら、姫のことを忘れちまつのも仕方ないよな！ ハハハッ！」

「こやそのつづつはおかしい」

思わず耳のない猫型ロボットのノリで反射的に突つ込んでしまつた
じやないか。

清臣殿は完全に涙目になつてこるし。苦労してるんだなあ……。

「公達さんのおつまみがたりだよおーーー一刻あまりも放置したままなん
て、絶対にまずこよーーー！」

「……まつたぐ。麗羽……袁本初のことだけど、
荀都尉が急病の知らせが来た為、後日再度席を設ける……と伝えて
出てきたから大丈夫よ。

貴方の威光とやらにやられたのでしゃうつとおこしたから、勝手
に納得するでしょうこ」

助け舟とばかり、鼻で笑いながら『威光』などと叫ぶ粗鄙をとる、
義母上、清臣殿、長騫殿が口々に謝辞の言葉を返してこぐ。
その中でも、清臣殿の弾けるよつた笑顔が印象的である。

ただ、孟徳さん、欲情を刺激されたとはいって、即座に舌なめずりは良くないとと思うよ？

長騫さんが本能的に威嚇し始めかねないから。

それにしてもや、誰も否定しないんだね。

既にこの時期から威光（笑）と思われてることについて。
視線で紗耶や妙才殿に問い合わせてみると、苦笑いしか返ってこない
ということは、

つまりはそういうことなんだろうな……。

「荀公達、今回は貸しにしておくわ。

どんな形で返してもらえるのか、楽しみにさせてもいいわよ？」

「……善処しますよ、孟徳殿」

トイチなみの金利で返済を求められそうで嫌過ぎるわ！
ほんまにええ顔してるわ、このサドめつ！

「また失礼な」とを考えているわね？」

「HAHAHA、滅相もない！」

「ひーちゃん、それじゃ胡散臭い外国の人の笑い方だよ……はむは
む」

紗耶よ、フォローしてくれてありがと。だが、雑煮を食べながら
なのは行儀が悪いぞ？

美味しいんだから仕方ないって満面の笑みで言わると、

俺としては全力で肯定する以外の選択肢はあり得ないわけだが。

「おお。無言でお椀をかつ食べひつ熱いの、長鷹殿の食べっぷりも気持
ちいいな。

あれだけ夢中で食べてもらえんど、作り甲斐があるつてもんだ。
はい、おかわりですね、どうぞどうぞ。

「とても美味しい汁湯だし、かうへあつたまひまみのとく……公達さん、
あつがとうござこます」

清田殿は少しごりこ報われればいいと思うのや、礼を言われるまで
もないと思います、はい。

ゆつべつまつこつしていけばこと細ひよー。

「姉者、これは何とも味わい深いものだな……最初こそ見た田に騙
されるが、
海藻や魚の風味もしつかりしてこて、それに、何か豆のかけらが入
つていいののか?」

「秋蘭、これはおやべく大豆よ。全べいの見た田に騙された者は哀
れといづべきね。

しかし、この色合にななるのは何故なのかしら

一番最後まで口にするのを躊躇つていたところに、田の田代ヤ顔だ
よな、孟徳ぞ……。

「……はつと、首筋に冷たいものが当たつてこるぜ……。

「いじめ答です、孟徳殿。ですから、その鎌は下りしましまつ

「懲りずに失礼な考えを持ち続けるからよ?」

「その感応能力……これが一コータイプか……」

「ひーちゃん、華琳様は本当に、常人の通常の三倍の速度で動ける人だよ」

「アリまで出来るのなら、赤くないのが残念すぎる……！」

「夏蘭、流石に角が生えてないから無理だと思つたの」

「あれ？ 義母上にこの話題をしたことがありましたつけ」

「今、紗……じゃなくて、春ら……わがすいか、元讓ちゃんに聞いたのよ~。もつ仲良しだもんね~」

「うそ~。仲和お母さんと仲良しですよね~」

「やだ、紗耶ちゃん！ 銀花って呼んでくれないと嫌！」

「せめて、銀花さんで」

「やだ」

「銀花……ちやん？」

「許す一つ！」

「あやーつ！」

益徳殿との不毛なやり取りの間に、母娘の契りを果たしていた……

だと……。

おまけに明らかに真名の交換まで済んでいるという事実。

義母上が飛び付いてそのまま抱擁に入るわ、完全に私的モードだわ、紗耶もキャッキャ言つてゐるし、田の保養になるわあ。

以前に体型について触れたが、義母上は元々小柄な体形で童顔である。

二人の子供を産んでも、それが殆ど変つてないとなると、姉妹のじゃれあいにしか見えない辺りが本当に恐ろしい。

「……照れ屋で人見知りの春蘭が、もつ打ち解けていり……ですつて……。

おまけに苟都尉どの印象が一気に崩れ落ちて……くうつ

孟徳殿にも衝撃が走つたようだ。よろめいてる位だからよつぽどだ。妙才殿がすぐに背中を支える辺り、さすが忠臣の鏡。

しかし人見知りつてことは、

紗耶の性格が地になつてゐるから、本来の春蘭さんの性格からは程遠いわけか。

通常の三倍（後書き）

銀花さんはもともと幼い体型に加えて、夏蘭くんから日々若さを吸い上げているので、紗耶（春蘭）との睦まじいやり取りも眼福と化すのです。
なにそれこわい。

「つばつ（繪畫也）

「つばつ=幼き猪の」こと。

「なるほど、手間暇をかけているからこそ、この味なのね。煮て漬した大豆と麹、塩を適量で混ぜ合わせたものを一年程度発酵する。

下準備に、綺麗に洗った大豆を約一日、三倍ほど水に漬けて、大鍋で約三刻ほどじっくり煮込んでから、丁寧にすり潰すと

「大豆の煮あがりは親指と小指で潰れるくらいが目安です。

小桶に漬けている味噌がありますので、借りの一つとしてお渡しますよ。

ただ、仕込みに塩を大量に使つことを思えば、あまり表に出し過ぎなさいませぬよう

「あら、わかつてゐるじゃない。礼を言つわ。次の返礼も楽しみにしてくるわ。

欲を言えば、貴男が私に仕えてくれるのが一番の礼かしらね」

「御戯れを。第一、我らは自己紹介すら正式に交わしていないではありませんか」

八半刻が経つた頃、孟徳殿は我を取り戻した。

どうにも、一目置いていた義母上の人物像の崩壊と、春蘭……紗耶の見たことのない一面の連續に、流石に現実から遠ざかってしまったと思われる。

この世界の紗耶が六歳。一歳差だから、彼女もその年齢に近いのだろ。

に関わらず、この短時間で立ち直ることを称賛すべきかもしない。

それではまずは、あの調味料の製法は、ところ話になつたのである。まあ、この時代、塩は国が売買しているから、値段がおそらく高い。

義母上の力を借りて、河東郡に私有地を押さえてもうつて、岩塩の採掘にかかるうとしているところだが、大がかりにやれば足がつくし、義母上にも迷惑がかかるからな。俺たちが……突き詰めれば、俺と紗耶が使うに困らない量を生産出来れば十分だしな。

「今更とは思うのだけど？」

「だからこそ、です。それに真名や字が飛び交うの場ですから、一度まとめる意味も込めて」

「……春蘭の、貴方に対する呼び方も含めて？」

「私が、元譲殿を呼ぶその名の意味も。貴女は知る権利があると思います。

ただ、荒唐無稽な話としか感じられない可能性もあるかと存じますが」

「……分かつたわ。

では、表向きの血口紹介はそれと済ませて、長騫たむかせ退出してもりいましょう」

「夏蘭、私も聞いていいのー？」

「はい、義母上。ただ、それを聞いて、

私が狂人と化したと感じれば、躊躇いなく絶縁なさいませ。
そう思われてもやむを得ない話になりますゆえ」

「私が夏蘭を手放すなんてあり得ないもんー。

私のふかあい愛情がそんな程度でブレるわけがないー！」

「銀花ちゃんは確かにぶれないと思つた。太鼓判押せる気がする」

「紗耶ちゃんは分かつてゐる！ でも、夏蘭にとつ……もがもが」

とんでもない発言をしようと思われる義母上の口を強制的にチャックする。紗耶も変に同意しないの。

息子と結婚するなんて意志をこんな場で公言されたら、荀家が滅ぶで……。

流石に、桂花や友若を幼少時から路頭に迷わすわけにはな。

ほんとに義母上え、早く公の顔に戻つて下され。

完全に欲望丸出しの困つた大人でしかないです。また、孟徳殿が卒倒しますよ。

……ただ、いい機会ではある。

紗耶と出会えた今、紗耶さえいてくれたら、他の繫がりを失つても、正直俺は幸せに生きていける。

義母上や義父上、桂花や友若に対する愛着はあれど、紗耶への想いとは比べようが無い。

俺の中では、全ての優先順位が紗耶の独り勝ち状態だし、その価値観が変わることもあり得ない。

もし、飲み込んでくれたとしたら、もうじばらくは一緒にいても構

わない、そんな感覚。

居心地は悪くないが、失つても紗耶さえいれば再構築できてしまつから。

ただ、馬鹿正直に『転生』と言つても、信じられる話でも何でもない。

蝴蝶の夢、と原作でも一刀君が言つていたが、その辺りに落とし込むのがいいだろうな。

「待つてくれよ。アーティキの話をあたいらも聞きたいぜ。」

「文あせん、だ、駄目だつて！ どう考へても込み入つた話だよ。」

「？」

「だつて、元讓殿と公達のアーティキは初対面なのに、どう見たつて、あたいと斗詩みたいに、すつげー愛し合つてゐる仲にしか見えないじやないか！」

「これはあれだろ！ 生まれる前から魂で結ばれた恋人同士つて奴だろ！」

……当然ずつぽうなんだろうナド、殆ど正解ですね。彼女つてカンが鋭い方でしたっけ？

原作だと雪蓮さんや恋さん……孫伯符さんか田奉先さんの特殊技能みたいな所がありますけど。

「だから、アーティキの話を聞いて参考にしたら、斗詩の仲をもつと深められるだろ！」

「というわけで、公達のアーティキ！」

あたいの真名は猪々子いのこって言つんだ！ 宜しく頼むぜ。」

「……え？」

なぜか、長騫殿にアーキつて言われてるし、猪々子つてそれ貴女真名じやないですか？

あれ？ 真名許されたの俺？

「ほり、斗詩もー。あたいのアーキなら斗詩にとつてもアーキだー。」

「なんか色々おかしいよ、文ちゃん……。」

ただ、公達さんになら、いろいろ相談できるよね。

元譲さんが絡まない限り、噂通り優秀で、話していくもととても理知的な人だし……。

よしつ、決めました！ 公達さん、私の真名は斗詩つて言います！

文ちゃん共々、どうぞ宜しくご指導下さーつー。」

……ええええええええええええええ！？

つゝ（後書き）

公達くんは幼少期から死亡フラグを立てるようになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8348z/>

荀公達の憂鬱～真・恋姫†無双

2012年1月14日17時48分発行